

9月24日(月)の東京都支部大会参加申込み受付中！

トピックス 亀戸スポーツセンター教室が6月から再開

館内修理のため休館していました亀戸スポーツセンターが5月26日から営業を再開いたしました。同スポーツセンター主催の太極拳教室も以前と同様の内容で6月12日(火)から再開されることがすでに決まっております。第1期(6月～8月)の参加申込者は5月28日現在51名とのことです。

これに先立ち、さる5月29日(火)には、自主サークル亀戸SC会の最終練習が行われました。スポーツセンター休館後の昨年6月下旬からちょうど1年間自主運営で江東区青少年センターをお借りして練習を続けてまいりました。会長の久保明也さん、幹事長の鈴木圭二さんはじめ幹事の皆さんのご尽力、会員の皆様の熱意でこの期間を無事乗り切ることが出来ました。有難うございました。

なお、久保明也会長におかれましては、かねて闘病中のところ、さる5月22日、容態が急変してご逝去されました(享年78歳)。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

自主サークルの期間の1年間の皆勤、精勤の方々を以下のとおり表彰させていただきました。

皆勤賞； 鈴木幸子さん、梅津勲さん、西野信一郎さん

精勤賞； 大森和子さん、鈴木久子さん、田中高代さん

東京都支部総会に出席

5月25日(金)に代議員制度導入後初めての東京都支部総会が開催され、私も、江戸川区代議員の資格で出席してまいりました。またこれに先立って9月24日開催の第6回東京都支部大会のスタッフ会議も開催されました。

閑人閑話 トルコ余聞

先月5月号で短歌と写真でご紹介したトルコ紀行ですが、少し付け足しのお話をいたします。

文明の十字路

トルコはたいへん長い歴史を持ち、複雑極まりない変遷を経て今日に至っている国です。

古代のヒッタイト王国に始まり、ギリシャによる都市国家時代、ペルシャによる支配、そしてアレキサンダー大王が駆け抜け、次いでローマ帝国の首都がコンスタンチノーブル(イスタンブール)に移り、そして帝国が東西に分裂して東ローマ帝国のちのビザンチン帝国時代。11世紀に中央アジアの遊牧民族が侵襲して中央部のコンヤにセルジューク朝を樹立。第4次十字軍がコンスタンチノーブルを占領、のちにギリシャが奪還してビザンチン帝国を再興。モンゴルの侵襲のあと、オスマントルコ族が台頭、コンスタンチノーブル陥落。オスマン帝国は東欧、北アフリカ、中近東、西アジアに及ぶ版図を占める大帝国となる。第1次世界大戦でドイツと組んで敗退。ギリシャの侵襲を許す。1923年アタチュルクがギリシャ軍を撃退、帝制を廃して国家体制の近代化に成功、領土は大幅に縮小するもトルコ人のトルコ共和国として国際的な認知を得る。……というのがざっとした歴史です。

驚くのはこのときの戦後処理の一環として領土、国境線の線引きのやり直しとともに民族交換を行って

いることです。100万人のギリシャ正教徒をギリシャへ送り返し、代わりに50万人のイスラム教徒を受け入れています。

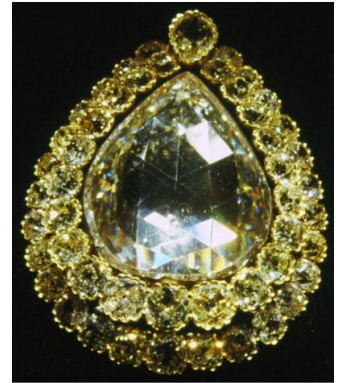
トルコは“文明の十字路”といわれていますが、それはたくさんの血が流され、たくさんの血が交わったということに他ならないのだということを今回の旅でつくづく思い知らされました。

現在の領土は、ギリシャ、アルメニア、イラン、イラク、ブルガリア、シリアと、そして黒海を隔ててロシアやウクライナと、国境を接しています。クルド人などの少数民族問題も抱えていますし、この国の内政や外交などというものは本当にたいへんなのだろうと、思わず、日本の現状に引き比べて考えてしまいました。

ダイヤモンド異聞

オスマントルコ時代の王宮がトプカピ宮殿です。往時の権勢と繁栄を偲ぶ数々の建物群や宝物を見ることが出来ますが、なかでも70×60mm、86カラットの大ダイヤモンドは圧巻です。大きさといいその煌めきといい見る人を圧倒させずにはおきません。これは漁師が拾った原石をスプーン職人がわずか3本のスプーンと交換して手に入れたという由来から“スプーン職人のダイヤモンド”と呼ばれているものです。

じつは、これよりさらに大きなダイヤモンドを見たことがあります。大きさはなんと182カラット！世界最大級のピンクダイヤモンドです。もともとはインドのムガル王朝が保有していたものを1739年に当時のイラン軍が侵攻して略奪してきたものとされています。私が首都のテヘランで見たのは1974,5年ごろでした。1979年にはホメニーによるイスラム革命が起きて王朝は崩壊し、パーラビ国王夫妻も海外に亡命してしまいましたが、この“光の海”は持ち出すことは出来ずに、現在はテヘランの宝石博物館に展示されているそうです。ダイヤモンドも人間もいろいろな運命に翻弄されるものですね。



スプーン職人のダイヤモンド

ユダの木

街のあちこちに赤紫の花をいっぱい咲かせている樹の名前はトルコ語で^{エルギュヴァン}“Erguvan”と言うと教わりました。日本で言う“花蘇芳”^{はなすおう}ではないかとの同行の皆さんのお話でしたが、同時にこれは西欧や中近東では“ユダの木”と呼ばれているのですという説も出ました。ユダとはあのキリストを裏切ったユダのことです。ユダがそれを後悔して自殺したことは知っていましたが、自ら首を吊った木がこの木で、それからユダの木と呼ばれるようになったということははじめて知りました。

もともと、帰ってからよく調べてみたら、フランス語で“ユダヤの木”、つまり中近東にある木という本来の意味が誤って“ユダの木”になってしまったとの説もあるようで、真偽のほどはよく分かりませんが、いずれにせよ美しい花蘇芳もとんだ名前を背負ってしまったものです。

街中が世界遺産

イスタンブール（コンスタンティノポリス）はアジアとヨーロッパにまたがる街としてむかしから世界中の人を惹きつけてきました。町は南北に走るボスポラス海峡の兩岸に分かれていて、東側がアジア、有名なのがあのウシュクダラ地区です。西側は金角湾によってさらに南北に分かれていて北側が新市街、南側が旧市街です。

両市街を結ぶのが二層式のガラタ橋です。電車も車も



走り、人も通る上層とレストランやカフェが並ぶ下層とに分かれているユニークな橋です。橋の上には釣り糸をたらす人がずらっと並んでいます。橋の袂には遊覧船やフェリーの発着する埠頭があり、名物の鱈サンドや焼き栗などを売る屋台も出ています。【写真上；新市街からガラタ橋と旧市街を望む】

旧市街はユネスコの世界遺産に歴史地区として認定されていて、トプカビ宮殿やブルーモスク、アヤソフィヤなどがあります。あのオリエント急行の駅もこの地区にあります。バザールも2箇所あって、いつも人の流れが絶えません。髪の色も、瞳の色も、顔色も、服装もさまざまな人々が行き交っているのですから、見ていだけで気持ちがうきうきしてくる不思議な街です。

近くなったトルコ

いまトルコは海外旅行の人気の訪問先の一つということで、イスタンブールでもカッパドキアでも大勢の日本人、多くの旅行会社のツアーに出会いました。帰りの飛行機もほとんどが日本人といってもいいすぎでなくらい乗っていました。

じつは、トルコへは大昔に2度行きました。最初は1973年の11月、あるミッションの一員としてイスタンブール、アンカラ、そして黒海沿岸の小都市を回りました。2度目は1975年1月に同様イスタンブールとアンカラを回りました。このときは単身での出張旅行でした。当時トルコへは、パンナムとBOACを乗り継いで、南回りのルートで何箇所かの国の空港に立ち寄りながら25時間ほどかけての長いフライトでした。当時世界を代表する大航空会社であった両社も、パンナムはすでに倒産、BOACも経営母体も替って現在はBAとなっています。今回はトルコ航空のノンストップ便でわずか12時間のフライトですから、いろいろな意味で、まさに隔世の感がしました。

左顧右眄～さこ・うべん～ (60)

【第11話 拳の達人王向齋とその「意拳」について】

今号と次号では意拳の創始者である王向齋（王薌齋）を取り上げます。意拳は形意拳の流れを汲むいわば内家拳の一派です。

あまり正確とも思えませんし、またいろいろ異論もあるようですが、一応中国拳法は以下のように外家拳と内家拳とに分類されています。内功を重視するものを内家拳、外功を重視するものを外家拳とするという、あるいは仏教系を外家拳、道教系を内家拳とするという、前提での分類です。

内家拳	太極拳、形意拳、八卦掌、八極拳など
外家拳	少林拳、螳螂拳、三皇砲捶、通背拳、翻子拳、彈腿、戳脚、

(このほか南派拳法と言う流派群もある。また武当拳を内家拳に分類するケースもある。)

第1章 心意拳と形意拳

意拳を語るにはまず心意拳と形意拳の歴史を知る必要があります。明代に山西省の槍術の名人姫際可（1573～1620）が興した拳法が心意拳です。この拳法の得意技「崩拳」（下図・形意五行拳譜より）の動きから見てもいかに槍の名人の拳法であることが納得できるどころです。また河南省嵩山少林寺に伝わる拳技「心意把」は姫際可が伝授したものであるとの説もあります。（逆な説もあります。）

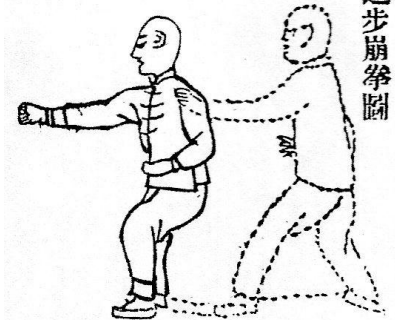
その後河北省深県出身の李洛能（1808～1890）がさらに工夫を重ねたものが形意拳（ほとんど同音）と呼ばれるようになり、山西省、河北省などで広く伝えられてゆきます。形意拳は陰陽五行説に基づく技法理論を持っているとされています。また三体式（三才式）站樁功と呼ばれる前足3分後ろ足7分の基本姿勢が特徴的です。三体式（三才式）の三才とは本来森羅万象の根源である天・地・人に由来するものです

が、この場合は、頭部・上半身・下半身の合一調和を求める姿勢といった意味で用いられているものです。

清朝末期における形意拳の有名な達人としては、山西省では**車毅齋**（1823～1914）、河北省では**郭雲深**（1820～1905?）などが挙げられます。**郭雲深**の「崩拳」は無敵の技と言われ、“半歩崩拳あまねく天下を打つ”と賞賛されました。**郭雲深**の弟子であった山東省出身の**尚雲祥**（1864～1937）も後にはその賛辞を受け継ぐほどの崩拳一筋の使い手であったといえます。また、同じく**郭雲深**に就いて形意拳を習った**孫祿堂**（1861～1932・河北省出身）は、八卦掌と武式太極拳も習得して、これらを融合させて自ら孫式太極拳を創出したことで有名です。

形意拳の技法は、シンプルだがきわめて攻撃的で、相手にかまわず前進して相手を打ち倒すというところにあるようです。日本の剣術に喩えれば、いわば薩南示現流といったところだと思います。

第二節 進歩崩拳
由開勢兩手變拳進左
左拳陰出順落齊心左
順回陽落齊臍同時右
隨進腰對左踵提肛兩
稍紮



第2章 形意拳から意拳へ

さていよいよ**王向齋**（1886～1963）の話に入ります。王向齋は河北省深県の裕福な家庭で生まれましたが、生まれつきの病弱を心配した両親が同県出身の郭雲深に頼み込んで幼くして彼の内弟子になります。郭雲深はすでに高齢でまた足も悪くしていたので、故郷に隠遁していたのですから、彼の最後の弟子となったわけです。もっぱら三体式站樁功で彼を鍛えたおかげで、たちまちに病弱な体質も改善され、早くも13歳の頃にはあまたの武術家と渡り合えるほどの腕前になったと言われていますが、まもなく師匠の死を迎えます。

その後北京に出て軍隊に入りますが、將軍吳封君（明末清初の吳三桂將軍の末裔）の目に留まり、さらには1913年には当時の大統領袁世凱の御前試合でさらに武名を挙げ、陸軍省武技教練所の教務長に就任することになったのです。しかし、やがて袁世凱が1916年に没し武技教練所も閉鎖されたのを期に、彼は諸国を廻る長い武者修行の旅に出かけました。少林寺で武僧恒林和尚と交流したり、湖南省で江南随一といわれた解鉄夫に挑戦して破れ、すぐ彼に入門して腕を磨いたとか、上海で形意拳の先輩の**孫祿堂**（1861～1932）と試合をしたなどのエピソードは多々ありますが、こうして彼は自分の拳をさらなる高みに引き上げるにより、改めて「意拳」と名乗るようになりました。

彼の意拳の特徴はもっぱら馬歩站樁功と三体式站樁功の基礎訓練に徹して、他の流派では金科玉条とされている套路をすっぱりと無くしてしまったことです。三体式站樁功は長時間（疲れてくると後ろ足を一步だけ進めて逆半身になってまた続ける！）にわたり、かつ長期間（三年も！）続けさせるのだそうです。これによって全身が内外ともにバランスよく鍛え上げられ、いわば静中求動で、いかなる動きにも自然に対応出来るようになる、実戦に套路は無用である、という理論ということなのです。（以下次号）

彩色『江戸名所図会』展の御案内

主催;大江戸熱愛倶楽部

場所; 森下文化センター（都営線、大江戸線の森下駅より徒歩6分）

日時; 6月18日(月)から6月23日(土)午前中まで。【都合により日程変更】

テーマ; 鬼平犯科帳に登場する深川・本所・浅草界隈の彩色「江戸名所図会」全26景
茶木は「州崎弁財天」と「長昌寺」の2点を出品していますので、ぜひ一度ご覧ください。